
サンタが街にやって来た！

井沢あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタが街にやって来た！

【Zコード】

Z3048A

【作者名】

井沢あや

【あらすじ】

野富夢斗は中年サンタクロース。久方ぶりの仕事に胸踊らせる浮えないサンタと病弱な純粋美少女のクリスマスストーリー。笑い有り、涙有りの現代版ファンタジー！

プロローグ

鳥籠の中の小鳥たちも、飛び立てない自分のことを懐んだりするのだろうか。

歩み出せないあたしのよう、心で泣いたりするのだろうか。

鮮やかな羽根を見るたびに、締め付けられるこの想いは異常でしょうか。

今はただ、なすすべもなく……。

ここは東京都、のはずれもはずれ。都心とはほど遠いこの場所に男は住んでいた。

名は野宮 夢斗^{ムタロウ}。薄くなりかけた髪の毛と飛び出たお腹を持つ、典型的な日本のオジサンだ。

さびれた住宅地に馴染むボロアパート、ユメミ荘の一室に夢斗は住んでいた。側面にはびっしりと苔が生え、長年手入れされていないのが一目で分かる。

こんな冴えない彼が、ある一日だけは誰もに愛される存在になれるなんて、おそらく信じられないだろう。しかしこれは紛れもない真実で、夢斗はその名の通り人に夢を与える、サンタクロースその人なのだ！

サンタが街にやって来た！

午後十一時、夢斗は重い体を何とか起^さす。

一人息子で、唯一の家族である夢太郎^{ムタロウ}は、無論とっくに家を出ていて、食卓には丁寧に朝食まで用意されていた。

傍らには、高校生にしては達筆すぎる文字で、暖めて食べて下さい、とあった。

夢斗は寒さに身震いを一つし、無造作に置かれていたカーディガンを羽織った。

「ううん、

「あ、これうま～～」

夢斗は暖め直した完璧すぎる朝食（すでに昼食だが）に舌鼓をうつのだつた。

話は変わるが、現代の子供の夢問題について存じだらうか？

子供達が夢を持つ気持ちは、現在低下の一途を辿っている。これは近年、幼稚園児ですらサンタクロースを全く信じていない子がいることからも分かるだろう。そもそもの問題は保護者のほうにあるのだが、この際それは忘れておこう。

世間的にはあまり知られていないが、ことサンタの世界に置いては、常識的かつ深刻な問題。それが子供の夢問題なのだ。

例外なく夢斗も苦しんでいた。

ここ十年ほど、夢斗の“サンタクロース事務所（株）”には、一件の依頼も入っていない。実質、収入はゼロ。パートタイムの僅かな給料で生計を立てていた。

サンタクロースの報酬については、子供の夢を壊すとアレなので控えておこう。

朝食を食べ終えた夢斗は、慣れた手つきでパソコンを起動し、自分のホームページの更新やチャットにいそしんでいた。息子の使うスペースだけが片づけられた、野宮家の異様な半汚部屋には、マウスを叩く軽やかな音だけが鳴っていた。

もうすぐクリスマスだというのに、夢斗が準備をする気配は微塵

もない。

「 - - その時だつた。

夢斗のスウェットのポケットが振動し、軽快なメロディーが部屋に響いた。着うたは浜 あゆみ。映画の主題歌にもなつたアレだ。知らない番号でも、夢斗は躊躇わず通話ボタンを押す。

「もしもし」

「あ、そちらはサンタクロース事務所さん、ですか？」

夢斗は思わず姿勢を正した。

「はいっ！ご依頼でしうか？」

「ええ。その、娘に、プレゼントを届けて欲しいんです。僕は仕事の関係で留守にする事になりそうなので……」

男は疑心暗疑と言つた様子で、その声はすこし頼りなげに聞こえた。

「かしこまりました。一十四日の夜でよろしかつたですか？」

「はい」

「それでは、えー、お嬢さんのお名前と、ご住所を教えていただけますか？」

男は住所と名前を告げると、よろしくお願いしますと言い残し電話を切つた。

夢斗の両手には拳が握られ、しつかりとガツツポーズ。久方ぶりの依頼が舞い込んだ瞬間だつた。

。 。 。 。 。 。 。

月明かりに照らされて、その美しい躯が浮かび上がる。
白い肌、細く滑らかな手足、綺麗な金色の髪と瞳。……なんて可愛らしいのかしい。

野宮家の洗面所にフワフワと漂う召使い妖精は、やう思つてゐるに違いない。

なにせ先程から、軽く一時間は鏡の前で自分の姿に見惚れているのだ。

「ブランカ、早く行つてくれないか？君が娘さんの手紙を取りに行つてくれない限り、なにも始まらないんだ」

ブランカは、夢斗にむかつて舌をつきだした。

彼女にとつて、召使い妖精はサンタクロースの命令に忠実であるべし、とこう妖精の捷は皆無らしい。

「ああ。ああ、分かつた。まだ身支度が済んでいないんだね。ゆつくつすればいいさ」

夢斗はあきらめたようなため息をつき、投げやりに言つてその場に座つた。

それを見たブランカは、満足そうに微笑んで消えた。
確認すると、夢斗はすぐさま布団に潜り込んだ。

夢の中で、ベットの上の優げな少女が、夢斗に助けを求めていた。

……。

あの頃のあたしは、王子様が現れるのをただ待っているだけの、弱虫でした

あの頃のあたしは、嫌われるのを恐れ誰にも心から打ち解けることが出来ませんでした

あたしは籠の鳥でしかないのに、本当はお城から出られないお姫様なんだと思っていました

喻え一時の夢だとしても、信じて、いたかつたんです……

夕日が黄金色に輝き、閑静な住宅街をその色に染めていた。どれもが夢斗の家より数倍は大きく豪勢で、何故だか威圧感を感じる。夢斗は、周りと負けじ劣らぬ風格で佇む依頼主の邸宅前を訪ねていた。

電柱の陰に潜む姿は、ストーカーそのもの。職務質問されれば間違いなく警察行きだらう。

塀が高く、中の様子は見えづらかったが、2階のテラスの窓になると少女らしきシルエットを確認できた。

「後藤田 サラ、10歳。A型。9月1日産まれの乙女座でなかなかの美少女、つと……」

夢斗は手元の資料を音読する。最後の方に夢斗の主觀が混じつて

はいるが、これは少女のプロフィールである。

夢斗は珍しく悩んでいた。

少女の欲しがっているプレゼントが、あまりに突拍子もないものだつたから。

以下は、ブランカが持ち帰った手紙の一節である。

“サンタさんへ　あたしは体がよわいので、みんなみたいに学校にいけなくてさみしいです。友だちがほしいです。おねがいします。

サラより”

いくら夢斗がサンタクロースだからといって　友達　を下さいとはこわしか無理難題だ。頭を抱えるのも頷けるだろ？

「ん？……さては青春　かな？」

突然、意味不明な言葉を発しながら、夢斗は一本先の電柱まで足を運んだ。

そこには少年がいた。夢斗と同じくサラの家を眺めている一人の少年。夢斗は静かに声をかけた。

「なあ、少年よ。ちょっと時間あるか？」

「うわあああつ！……お、お前誰だよ！急に近付いて来んな！！」

夢斗の顔を見るなり少年は叫び声をあげ、驚きのあまり腰を抜かしてしまった。

「だいじょぶか？」

夢斗は直ぐ様手を挿しのべたが、無情にも少年に振り払われた。払われた手は行き場を失い、夢斗の頭をボリボリと搔く。

「ああ～……ちょっと頼みがあるんだが……」

「キモツ」

少年は2歩ほど後退りながら言い放つ。

「そーゆうこと言つちゃうのかー。せつかくあそこの窓辺に映る麗しき美少女、後藤田　サラちゃんのお友達に任命してあげようと思ったのに。残念だー、他の子に頼まなくちゃなあー。ああ残念だな

「えつ……！？」

「ん？ 何か言いたい」とでも？

夢斗はいやみつたらしく微笑んだ。

「あ～、そんなに言つんだつたらやつてやつてもここんとこ振り舞つ。

「もうか～いやあ～有り難い」

（扱いやすい奴で良かった）

「よし、少年よ。如何は？」

「品崎 蓬一」

「」の日、ストーカーまがいコンビが結成されたのはいつまでもない。

シンと張る空氣に、包まれ抱かれ、こんな幸せ、失つてしまつて怖いよ……。

甘いケーキ、七面鳥、食べきれないほどの一駆走に、赤と緑の装飾、眩いばかりに輝くイルミネーション、そして大好きなパパの笑顔あたしが一番大好きだった口

ピンポーン。

震える指先で、少年はその家のチャイムを押した。緊張のためか顔はゆでダムのように真っ赤で、腕に抱えたピンクローズより赤いほどだ。

インターほんからは、女性の声で儀礼的な応答が返ってくる。

「はい。どちら様でござりますか？」

「あつ…え…と、オレ、僕、品崎凌です。サツ、サラさんのお見舞いに伺いました！」

凌はやりきつた安堵感に思わずため息をついた。いや、グダグタすぎてやりきつたのには程遠いが……。

「サラお嬢様の？」

女性は一瞬驚きを露にしたが、直ぐに元の冷淡な口調に戻った。「かしこまりました。確認を取つて来ますので、少々お待ち下さいませ」

凌は返事をしようとしたが、受話器の切られる音の方が先に響い

た。

一方受話器を切つたメイドは、主人の御子女に当たるサラの部屋へと急いでいた。

「お嬢様、お見舞いの方がみられてますが、どうなさいますか？」

「だあれ？ またおばさま？ それなら今日は会いたくないわ」

サラはその紅色の唇をつんと尖らせた。

「尚子様はあれでも悪気はないんですよ。それに、お見舞いの方は品崎様という方です」

サラは少し考えるそぶりを見せたが、すぐに返答した。考え方をするときに自身の長いブロンドヘアを指で弄ぶのは、どうやら癖らしい。

「知らないわ。誰だろ？？」

「それではお引き取り願いますね」

メイドは部屋を出ようとしたが、小さな掌が彼女の服の裾を掴んだため引き留められた。

「あたし、会つてみたい！」

「いけません！ もしお嬢様に何かあつたら……私」

メイドは狼狽して声を荒げた。サラは彼女をなだめるように、両手でメイドの手を握りしめる。その様子からは、到底まだ十歳の少女には思われなかつた。

「大丈夫。ずっと見張つていてくれたつていいから、あたしを信じて？ お願ひ！」

「お嬢様……」

メイドが決断するのに、そう長くはからなかつた。

大きなシャンデリアに大理石の床。其処だけで十畳はありそうな

玄関ホールには、まるで結婚式場のよつた赤いカーペットが敷かれ、中央の階段まで延びていた。

菱は目前に繰り広げられる別世界に、ただただ啞然とし、マヌケに口を開けていた。

階段は中段辺りで左右に分かれているもので、菱を外国映画の中にでも入ってしまったような気になさせた。

「ひねらへじうわ」

さつきインター ホンに出たメイドは、階段の左側を手で指し示しながら言葉を発した。彼女はありきたりで地味な配色のメイド服を着込んでいて、見た目には21・2歳といったところでまだ若い。

菱は落ち着きなくキヨロキヨロと辺りを見渡しながら、メイドの後を慎重に歩いた。なんだか、堂々と歩いていい場所には思われなかつたのだ。

階段を上がりきると、長い通路があり、幾つもの扉が並んでいた。シャンデリアは下から見上げた時より近く、更に大きく豪華に見えた。

メイドは振り返る事なく、真っ直ぐにサラの部屋へと進んでいく。少し立ち止まつていた菱は遅れをとり、慌ててメイドの後を追つた。

「お嬢様、失礼致します」

「ええ、どうぞ」

中から聞こえた細く美しい声に、菱は思わずドキリとする。

メイドがドアノブに手を掛け、其れをそつと回す。

キィ……と、鈍い音が響いた。

「いらっしゃいませ。初めましてと言つたほうがいいのかしり?」

ドアの先には、菱が長い間憧れていた少女が微笑んでいた。名前すら、最近怪しいオジサンによつて知らされた想い人が……。

「初めまして。僕は、品崎菱といいます。えと……あ、ようじくお願ひします」

「ふふっ、よろしくお願ひします」

サラの微笑みに、再び頬を赤く染める菱。こんな拙い出会いでも、

凌にひとつは夢のようで、すこし幸福な時間だった。

キミは知らないだらうけど、あたしにとつてキミだけが本当の友達なの。それは今でも、これからも、決して変わらない真実

あの日はホワイトクリスマスだったよね
だから、雪はキレイだな……

真白な雪の結晶は、哀しく暗い色に染まつた

陽気なクリスマスソングに合わせてリズムをとりながら、それこそ陽気に街を歩く夢斗。

何せ今日は、待ちに待ったクリスマス・イブなのだ！

菱はあれから、冬休み中ということもあってほぼ毎日サラの家を訪れ、夢斗の思惑通り、順調にサラと仲良くなつていた。夢斗はその一部始終を、いつも拝聴していたので作戦の成功に喜んでいた。これは変な意味ではなくて、サンタクロースには世界中の子供達の声を聞くことが出来るという素晴らしい能力が備わっているからだ。今夜、夢斗がサンタとして彼女の前に姿を現せば、サラは間違いなくサンタの力で友達が出来たと思うだろう。

すべてが予定通り、順風満帆に思われた。

「それで？その後はどうなったの？」

サラは待ちきれないとばかりに続きをせがむ。サラにとっては、凌の学校や友達のありきたりな話が、未知で魅力的な世界だった。サラがあまりに楽しそうに笑ってくれるものだから、凌はサラといない時にも、次は何を話そうかとあれこれ考えながら過ごすようになっていた。

乙女チックで可愛らしげな空気が、いつのまにか凌の生活の核になっていた。

「ねえ、今日は夕食を食べていかない？おつきなケーキもあるのよ！」

話が一段落した頃には、夕日は沈み外は暗闇に包まれていた。

「いいの！？ホントに？」

「もちろんよ！凌は友達でしょ？」

「…うん。じゃあ、いただきます！」

サラに恋心を抱く凌にとって、友達という響きはなんだか嫌なものに感じられた。

「ブランカ！ブランカ出てこい！」

真っ赤な洋服に身を包み、真っ白な髪をはやした夢斗は、あまのじゃくな妖精を呼んでいた。

その姿は、童話の中のサンタクロース。まさに完璧で、髪ももち

ろん本物だ。

毎年クリスマスにだけ、夢斗や世界中のサンタ達は同じ姿に変わることができる。万国共通のお馴染みのサンタクロースに。

「ブーラーンーカー！…」

あまりの煩さに、召使い妖精も観念したように姿を現した。妖精は、外気の寒さに夢斗の懐へと飛び込んだ。真っ赤なサンタ服の保温性は抜群なのだ。

「よし。行くぞ」

夢斗はこれもクリスマスにだけ乗れる、愛トナカイの引くそりに腰を落とし、手綱を思い切り引っ張った。鈴の音が一度美しく鳴り、そりは一気に浮かび上がる。

トナカイのドリームは久しぶりに大空を駆け回る事が出来、嬉しそうに鼻を鳴らした。

「ドリームよ！今この世界で一番早いのはお前だ！行け！」

もちろん夢斗も、久しぶりの空中遊泳にアドレナリンを大放出させていた……。

サラは夢の中にいた。部屋の中に、ある意味不審者が忍び込んでいることも知らずに……。

「お嬢さん、お嬢さん起きなさい」

「んん……だれえ？パパ……？」

サラは重い瞼をうつすらと持ち上げた。瞳に赤と白をまどつた人が映る。

「サンタさん！？」

思考は一瞬にして覚醒される。サラは勢いよく身を起こした。

「メリークリスマス！プレゼントは気に入ってくれたかな？」

「メリークリスマス、サンタさん！やつぱりそうだったのね！ありがとう！…」

サラは興奮して、サンタの姿をした夢斗に抱きついた。

「会えて嬉しいわー！」「して去年も一昨年も、姿を見せてくれなかつたの？」

「すまなかつたね。だけど来年からは、毎年顔を見せに来るよ」「約束よ！」

サラは小さな小指を夢斗の前に差し出した。夢斗は太くてわたくれだつた、自分のワインナーみたいな小指をそれに繋げた。

「ゆーびきりげーんまんうーそついたーらはりせんほんのーまかゅびきつた！」

サラは歌い終わると、天使の笑みをサンタに向けた。
夢斗もそれに答えるように、いつもと違つて優しい微笑みをサラに向けた。

「私はそろそろ行かなくちゃあならん。元気でな、お嬢さん」「……はい！」

サラは寂しさを堪えているように見えた。サンタに次の配達があると思ったのだろう。

夢斗はサラの髪の毛を優しく撫で、彼女を再び夢の中へと導いた。すぐに、サラは可愛らしく寝息を立て始める。

「ブランカ、あれを」

妖精は懐から飛び出し、サンタのメッセージ入りクリスマスカードをサラの枕元に添えた。

夢斗はサラの布団をかけ直してから、そつとその家を後にした。

あたしの宝物は、ビニールでも売つてるクリスマスカード

だけど、このクリスマスカードは世界にたった一つだけ

雪深く純白なあの日の記憶。あたしは罪を犯しました……

ああ、神様……

サラの所からの帰り道、夢斗は口笛を吹きながらそりを走らせて
いた。

「今日は素晴らしい日だー世界はなんて素晴らしいんだろ?、なあ
お前達」

ドリームはやはり嬉しそうに鼻を鳴らすだけで、ブランカに至つ
ては返事すらしない。と、言つても妖精はもともと人の言葉は話せ
ないのだからあたりまえか。

それでも夢斗は満足だった。

こんこんと降り続く雪の中、もうすぐ家に着くといつ頃に、夢斗
は激しい胸騒ぎを感じた。ゾクリと背筋が冷える感触。

「* @S ./ + ¥ Z O % ! !

突然、ブランカが寒さも気にせず窓から飛び出し、夢斗に必死で
何かを伝えようとした。

「何だ? ブランカ、お前も何か感じたか?」

プランカは「伝わらない事が歯痒そうに、夢斗を今来た方へ引っ張つた。もちろん、小さな妖精の手でそりが動く筈はなかつたが。夢斗は手綱を引きそりを一時停止した。

「ドリーーム……戻るぞ！急げ！！」

プランカは安堵の表情を浮かべ、また早々と懐に帰つていった。夢斗は冷や汗をかきながら、今来た道をとにかく急いだ。

（……間に合つてくれ！）

深夜。少年、菱は不快な物音に目を覚ました。

「……菱！おま、ま、開け……！」

窓を叩く音に、混ざる呑みついでに聞こえたのは聞き覚えのある声。

「何だよ……」

窓を開けた菱は、すぐに自分の目を疑う事になつた。

「菱！大変なんだ！サラが……」

「サンタクロース！？」

菱は驚愕して、夢斗の言葉を遮つた。夢斗の方は、今の自分がサンタの姿をしていることなどすっかり忘れていたのだ。

「ええい！俺だ！野蛮だよ！」「

「は？夢斗のおっちゃん？？ビニがだよ！」「

「信じなくたつていいから来い！サラちゃんの一大事だ！」

さすがに菱も従わざるを得なく、パジャマの上にジヤンパーを羽織つた。が、窓の外にフワフワと浮かぶ真つ赤なそりに、自分から乗り込むほど状況に慣れてはいなかつた……。

「乗んの？俺が、これに？ヤだよ！落ちるって！」「

「サラちゃんが病院に運び込まれた。行くか、行かないのか、はつ

きつしるー。」

菱は唇を噛みしめた。

「行くよーー！」

夢斗も手伝い菱がそりに乗り込むと、ドリームは大空へと急発進した。

静まり返った空間に、女の涙混じりの金切り声だけが響いていた。
「どうして……。こんな時まで仕事が大事なんですか？私のような
ただの使用人が言えることではないんでしきうが、今日だけは言わ
せて頂きます！お嬢様は、今生死の縁をさまよつてるんですよ！？
朝一の便で戻つて来るべきでしょう！…ええ、ええークビになつた
つて構いません！それであの子が助かるのなら………」

メイドは、悔しそうに電話を叩き切つた。

医者の「覚悟はして下さい」という無情な言葉が、彼女の頭を支
配する。サラの笑顔が脳裏に映し出された。

まだ若いメイドにとって、1人で迎えるかもしれない少女の死は、
あまりに過酷なものだった。

サラのたつた1人の肉親だからこそ、どうしても父親にだけは來
て欲しかつたのだ。

「どうして……」

メイドは肩を落として長椅子に腰掛ける。

目の前の病室では、少女が必死に病魔と闘ついている。メイドは、
まだ泣けないと、強く思った。

「あの、お静かにお願いします！」

バタバタと駆け込んでくる足音。看護士の声が響いた。
それらはメイドのいる病室にだんだんと近づいてきた。

「サラは？」

聞き慣れた声にメイドは顔を上げる。彼女は一瞬に年をとつてしまつたような、そんな表情を浮かべていた。

「品崎くん……。どうしてここに？」

メイドはその後ろに立つサンタクロースに目をやつた。

「……そちらは？」

「野宮です。あー、ここに、保護者みたいなもんで。あまり気になさらないで下さい」

夢斗は菱の頭をぐりぐりと撫でながら言つた。

「そうでしたか……」

サンタの格好のおじいさんに、なんだか腑に落ちないような様子だつたが、メイドは何とか納得したようだ。

「それで、サラはー? どうなつたんだよー!」

菱が尋ねると、メイドは辛うじて、

「まだ分かりません

と、呟くだけだつた。

時は刻々と過ぎて行く。

メイドは椅子に頃垂れるように腰掛けたままで、夢斗はその横に立つていた。菱は、落ち着かないようで、病室前を行つたりきたり。時折ドアに耳をくつつけて中の様子を伺つていた。

みんなそれぞれに、サラの無事を祈つていた。

一体、何時間たつた頃か。それは、長く感じただけで、本当はそれほどでもない長さだったのかもしれない。

病室の、扉が開いた。

誰も何も言葉を発しない。

ひたすらの沈黙。

本当は、分かつていたんだ。すでに。

それでも、奇跡を信じて。

ピ

...

「残念ですが……」

メイドは堪えていた涙を零す。

凌は、医師を押しのけて病室に駆け込む。

夢斗は……、その場に立つけいした。

「サラ？ おー、起きるよー…… 僕まだ、話したことないばいあん
だからなー！」

凌の双瞳から、止めどなくあふれ出す涙。

「すりいよ……、俺まだ……サラに大事なこと言えてねえの……」

サラの細い体を揺する凌の肩を、メイドはそつと掴んだ。首を横に振るその動作に、すべての意味が込められているようだ、凌は腕をダラリと落とした。

やつと病室に入ってきた夢斗は、やつと、やつとサラの片へと歩を進める。

「神様……。なぜこの子が？」

そこには全員が、夢斗に田を奪われた。

「こんなに素晴らしい少女を、どうして連れていってしまわれるのです……？ 僕みたいなのがのうのうと生きて、どうしてこの子が死んでしまう？」

夢斗はサラの手を握る。懐から顔を出したブランカも、夢斗と一緒に涙を流す。妖精の涙は、虹色の輝きを放ちながらベットに吸い込まれてゆく。

「本物の……サンタクロース？」

メイドはほほそりと呟いた。

「サラ。俺からの、最後のクリスマスプレゼントだ……！」

夢斗の体が、銀色に輝き、氷のように弾けて消えた。

メイドも、凌も、医師でさえ、その美しさに目を奪われた。サラ

の両頬に、元通り赤みが戻っていることにすら気づかず。

「明日香さん？どうして泣いているの？」

サラが不思議そうに呟いた、それは若いメイドの呟き。

後に残つたのは、ダイヤモンドダスト

ハルローゲ（前書き）

この部分のみ、わざと一人称で執筆してあります。読みづらいかとは思いますが、ご辛抱下さいませ。

白い粉雪が舞い降りて、地面に落ちては消えて行く。ひんやりした感触を足裏に感じながら、あたしは歩みを進めた。

今年もある忌まわしい季節がやつて來た……。あたしが取り返しのつかない罪を犯した白い季節が。

「サラ、おはよう！」

背中から、大好きな落ち着いた声音が聞こえた。あの頃とは違つ、声変わりを済ませた大人の声。

あたしは今年、十五歳になつた。

来るはずの無かつた、十五年目の冬。

「おはよう、凌。今日も寒いね」

「ああ。そうだな。……もう体調は全然大丈夫なのか？」

凌が優しく気遣つてくれるのは嬉しい。だけど、あたしにそんな資格はない。大事に扱われるような女の子じゃないんだよ……。

「大丈夫。あの時から……、発作も病気も何ともないよ」

心配をかけない様に、表情だけで笑うのにも慣れてしまった。

感情を、押し殺す事にも。

凌は、安心したようにあたしに微笑みかけてくれた。

どうしてそんなに優しいの？

どうしてあたしを大切に扱つてくれるの？

どうして？

どうしてこんな酷い娘……。サンタさんの命と引き替えに生かされた様な女の子に……。

いつも、嘲り中傷しズタズタに引き裂いて欲しい……。こんな体、本当はもう存在すらしない筈だったのに……！

サンタさん、何故あたしなんかを助けたりしたのよ……。……あたしは貴方のことも、愛していたわ……。こんなに辛いなら、死んでしまった方が楽だった。

「…サウヘビうかした？」

菱の問いかけに、あたしは一瞬にして現実に引き戻された。

「つうん！何でもない。少しボーッとしちゃって」

菱と並んで歩いていても、あんなに望んでいた学校に通えるようになつても、あたしの胸にかかつた靄は、一向に晴れる気配はない。五年の月日が、あたしを変えた。無垢で無知だったあの頃のあたしは、もうどこにもいない。

あたしは一日を何事もなく平穏に過ごすと、いつも真っ直ぐに家へと帰る。だけど今日は、派手な装飾が施された街の中心を通りたくないで、わざと遠回りして帰った。

クリスマスなんて、この世で一番嫌い。

だつてもう、サンタクロースはいないんだもの。

そう考えただけで、あたしは頭が熱く濡れるのを感じた。この苦しみは、貴方を殺してしまったあたしに課せられた罰なんだわ。

ふと、見慣れない看板を目にした。薄汚れた小さなもので、じつくり見ないと何が書いてあるのか読むことはできないだろう。それには、サンタクロース事務所（株）と記されてあつた。あたしはいつも下を向いて歩いてたから、気付く筈もなかつたんだ。

「何これ……」

もちろんそんな看板信じる訳もなく、あたしは前を素通りした。いや、しようとしたのだ。

実際には、角を曲がって直ぐに立ち止まる事になつた。

「じゃーな。おっちゃんも元氣で！あと、そろそろ掃除した方がいいと思つた」

あはは、と楽しげに笑うその声は 莉。

「つるせえよ。いつかやるからほっとけ」

何故此処に莉がいるの？

それに、何だか懐かしい気持ち……。あなたは、誰？

「おっちゃん……、サラのことなんだけど」

「その話はもう時効だろ？ 今の俺に何が出来る？」

「あたしのこと……？」

「何だつて出来るさ！ おっちゃんのせいで、あいつがどれだけ苦しんでると思つ！？ あんなサラ見てんの、もう、耐えられないんだよ

……オレ」

莉、気付いてたの？ ずっと心配をかけてしまつていた……？

「あいつの事が好きだから……。辛そうにしてんのが辛いんだ。心から笑つて欲しいんだ……頼むよ」

莉が、あたしをそんな風に思つてくれたなんて、ちつとも気が付かなかつた。

知らず、目から涙が零れていた。

「……だめだ。会えない」

「何でだよ！」

「こんなみつともない姿をサラに見せられる訳がないだろ？ ガツカリするに決まってる。俺はもうサンタクロースなんかじゃないんだ」

「ああ……そうだ。

「妖精も、クリスマスの魔法も、トナカイも、もう何一つない……」

サンタさん……！

「そんなことない！！」

あたしは思わず曲がり角から飛び出していた。瞳に映つたのは、飛び出たお腹と薄くなりかけた頭を持つ、典型的な日本のオジサン。だけど、あたしにとつてはたつた1人のサンタクロース。

「……サラ！」

「あたしがどれだけ貴方に感謝してるか……。言葉に出来ないくらい。ずっと、会いたかった」

あたしはちゅうじゅうあの日の夜のよつと、サンタさんに抱きついた。見た目が変わったって、ぬくもりも、優しさも、あの日と回じ。

「サンタさん、大好きよ。ありがとう」

あたしは涙に濡れて霞む両眼を、しつかりサンタさんと会わせた。彼は少し動搖している風に見えた。

「約束、忘れちゃったの？五年間も、ずっと待つてたんだから」

あたしはわざと困らせるように唇を尖らせた。

「ああ、『めんよ。忘れてた訳じゃないんだ。ただ……』

「醜い中年オヤジだつて知られたくないんだよな？」

「お前は黙つてろ！――」

サンタさんが凌の頭をぐしゃぐしゃにする。見ると自然と笑顔になつてしまつ。

「そうだ！凌、あたしに何か言いたいことがあるみたいだけじ？」

「えつ？何……もしかして聞いてた？」

「ちゃんと聞かせてほしいな」

あたしはにつこりと微笑む。

「ここで？あ、えつと……」

「凌、がんばれ！」

「うつせえ！」

サンタさんの冷やかしで真っ赤になつた凌が、一つ咳払いをする。あたしは内心ドキドキしながら言葉を待つた。

返事はもう、決まつてゐる。

「五年前から、ずっとサラのことが好きでした――」

「あたしも、凌の事が大好き――」

こんな幸せな日は、もう一生訪れない。

哀しい白は、今七色に輝いた。

THE END...

ハルローゲ（後書き）

今まで読んで下さっていた数少ない読者様、感謝です。私の拙い文
章で、少しでも楽しんで頂けたなら尚更です。ほんとうに、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3048a/>

サンタが街にやって来た！

2010年10月8日15時31分発行